

六年生のニルスは仲良しの中学一年生の従姉^{いとこ}ベーリットに、二人が出会った不思議な女性ビッピ・ボッケンについてのとんでもないお話を^{つく}創って、レターブックで書き送りました。しかし、レターブックには「うそを書いてはいけない」という規則があったため、彼はベーリットから非難されました。その非難に対してニルスが言います。

[A]

規則その三「ビッピ・ボッケンに関する情報はすべて推理に入るまえに、それらが事実かどうかを確かめること」は、いいと思う。でも、少しぐらいは想像をまじえてもいいんじゃないの。なにからなにまで事実かどうか確認していたら、先へ進めなくなっちゃうよ。トール・オーゲ・ブリングスヴァルトっていう作家が、いい詩を書いている。

大地に両足をつけている人間は
じっと動かない

この詩は読書と創作の関係についても、いろんなことを教えてくれていると思う。というのは、好きな本を読んでいるときには、まるでその本が、ぼくの考えを外の世界へ飛び立たせてくれるような気がするからさ。本というのは、ただ紙の上にことばや絵がならんでいるだけのものじゃなくて、読んでいる人自身も、それを読みながら創作するものなんだ。

ちょうどいま、ぼくは英語の勉強のために『クマのプーさん』を原書で読んでいるんだけど、この本の中の一章に、カンガルーの子とトラの子が木に登って、そこから降りられなくなる場面があるんだ。それまでトラの子は、自分はなんでも世界一で、木登りだってだれにも負けないっていばっていた。でも、彼は木に登ることはできるけれども、木から降りることはできないことを忘れていたんだ。それで、かれらを木から降ろすために、プーとその仲間たちが救助活動をはじめることになる。

クリストファー・ロビン^ぬは着ていた上着を脱いだ。そのなかに飛び降りれば、カンガルーの子とトラの子はけがをしないだろうと思ったから。このとき、作者のA・A・ミルンは、クリストファー・ロビンのズボンつりとコブタのことを書く。

コブタがクリストファー・ロビンのズボンつりを見たのは、それまでにたった一回しかなかった。でも、その青いズボンつりのことは、けっして忘れることができなかった。コブタは、そのズボンつりをもう一度見られるのかと思うと、うれしくて胸がドキドキした。と同時に、とても心配になった。なぜなら、クリストファー・ロビンのズボンつりが、あのときのようすばらしい青色をしていなかったらどうしよう、自分が千回も見ているごくふつうのたいくつな青色だったらどうしよう、と思ったから。そして、クリストファー・ロビンは上着を脱いだ。それを見たコブタは、幸せで胸がいっぱいになった。彼のズボンつりは、まさしくコブタがおぼえていた、あの目の覚めるようなあざやかな青色をしていたから。それでコブタは、きょうはすごくいい日だ、と思う……。

この本のなかでは、ズボンつりのことが語られているわけだけど、これはじつは、べつのことも語っていると思うんだ。ぼくはこの話を読んで、ちっちゃかったころに^{きゆうか}休暇を過ごした農家の^{かべ}壁にかかっていた、^{はんせん}帆船の絵のことを思い出した。それはごくふつうの帆船だったけど、ぼくにとっては、世界でいちばんかっこいい帆船だったんだ。ママは毎晩、ぼくがその帆船に乗って、地球の裏側の見知らぬ国へ^{ぼうけん}冒険の旅に出る話をしてくれた。

ぼくは、もうひとつ、べつのことも思い出した。それは、きみにも関係があることなんだよ、ベーリット。

フラート氷河の山小屋まで登ったとき、ぼくたちは一枚のチョコレートに分け合って食べた。おぼえてる？夏の太陽がキラキラ輝いていたよね。へとへとに疲れたぼくたちは、チョコレートのかけらを口にほうりこんだ。きみはにっこり笑っていた。

あのときぼくは、山の空気のなかに、きみのほほえみのほかに、なにか特別なものがあるような気がしたんだ。チョコレートのあじと、ようやく山小屋にたどりついた満足感も、あの瞬間を忘れられないものにしてくれた。ぼくは、クリストファー・ロビンのズボンつりの話を読んだときに、それとおなじことを感じたんだよ。だから、読書は楽しいんだ。ぼくはそう思う。それに、ぼくをちょっとした詩人にもしてくれるしね。

なぞの女性ビッビ・ボッケンを追っていたニルスたちは、とうとう彼女がつくった「ふしぎ図書館」にさそいこまれてしまいます。それこそがビッビのねらい、ニルスとベーリットに「ふしぎ図書館」にたどり着くまでの冒険を書かせて本にすること！だったのです。本に関するどんな質問にでもすぐに答えられるビッビ・ボッケンは「本の魔女」でしょうか。

[B]

「あなたたちは、いままでにこんなことを考えてみたことある？わたしたち人間は、この惑星で——いや、ひょっとすると、全宇宙の中で——おたがいの考えや感情や経験を伝え合える、唯一の生きものかもしれないって？」

このときは、ニルスもわたしも、ただ首をふるしかなかった。

「人間は、何十万年もまえにも、そういうことができたのよ。そして、いまから五、六千年まえに、人間はものを書くことを発明した。これは、ことばというものに、まったく新しい可能性を与えることになった。それによって、何百マイルも離れたところにいる人たちとも、自分たちの経験を分かち合えるようになった。あるいは、何百年、何千年後の人たちとも。最初の書きことばとしては、『象形文字』が使われた。これは文字というよりも、むしろマンガに似ているわね。でも、そういう書きことばのひとつが、じょじょに変化して行って、やがて、ほんのわずかの文字だけを組み合わせでどんなことばでも表せるようになった。」

ニルスは椅子のはしっこにちょこんとすわっていた。その姿は、クラスの問題児が、急に模範生になることを決心したような感じだった。先生が、とつぜん、彼の興味を目覚めさせることをいったために。ニルスはいう。

「そうか。（ノルウェー語の）アルファベットは二十九文字しかなくても、それで大きな図書館がいっぱいになるだけの本が書けるんだ・・・」

彼女はうなずいた。

「いま、この部屋には限られたスペースしかないけれども、わたしは地下室をひろげて、その全部を図書館にするつもりよ」

ビッビ・ボッケンは、顔じゅうに笑みを浮かべた。

「でも、いまはアルファベットの話にもどりましょう。アルファベットの発明は、文字文化の歴史における最初の大きな革命だった。それまでは、何千年ものあいだ、人びとは石や、パピルスや、木片や、カメの甲羅や、粘土板や、陶片や、動物の皮や、蝸版や・・・そう、とにかくカラスの足跡のような引っかき傷をつけられるものなら、どんなものにでも文字を書きつけてきた。それは熱病のように、たちまち世界中にひろまった。やがて、本は羊皮紙や紙だけでつくられるようになった。それでもまだ、本は一冊一冊、手で書かなければいけなかった。本は、だからとても高価なもので、一般の人たちには手が出なかつ

たのよ。そのうちに、世界の多くの地域で、木の版に文字を彫りつける試みがなされるようになった。そうすれば、本のページをまるごといっぺんに印刷できるわけだから。そうして、すぐれた複写技術が開発された。でも、そういう『木版印刷』は、とても時間と費用のかかるものだった・・・」

「そこへ、グーテンベルクが登場したんですね」と、わたしはいった。ビッビ・ボッケンはうなずいた」

「そう、一四五〇年ごろに。ここから、わたしたちは、ようやく印刷術の話に入ることになる。それが文字文化の二番目の大きな革命よ。グーテンベルクは、溶かした鉛を鋳型に入れてつくった取りはずしのできる文字、つまり『活字』を使った。彼はもともと金細工師だったので、金や銀を細工するときの技術を応用して、アルファベットの文字を鋳造することができたのよ。彼はそれらの文字をならべて、本の全ページを印刷した。文字は取り外して組み替えれば、何度でも使用できた。こうして、それらは本の世界の原子や分子のようなものになった」

ニルスは咳ばらいをしてから、こういった。

「ちょうど原子や分子が集まって一頭のクマになるように、アルファベットの文字が集まって、一冊の『クマのプーさん』の物語ができるわけだね」

[C]

親愛なるニルス

いきなりだけど、こういう書き出しではじめさせてもらうわね——

日本語版『ビッビ・ボッケンのふしぎ図書館』へのあとがき

あなたの読みまちがいじゃないわよ。きょうの午前中に、出版社の人から電話があったの。かなり意気こんでいたわ。信じられないことだけど、わたしたちが十二、三歳のころに書いた本が、ひとり立ちして、知らないあいだに外の大きな世界を動きまわっていたみたいなの。『ビッビ・ボッケンのふしぎ図書館』がオスロで出版されたのは、もう九年もまえのことよ！

その本が、こんど日本でも出版されることになったのよ、ニルス！日本語には「漢字」っていう表意文字と「ひらがな」っていう表音文字があるってこと知ってた？日本人は何千何万という漢字を識別しながら本を読んでいるのよ。日本のような「超」がつくハイテク国家でも、いまだにたくさんの本が読まれているみたいね。

日本の例は、一種のパラドックスだと思うの。これは活字文化が、まだ映像文化に対して優位を保っているってことじゃないかしら。それはたぶん、ビデオや映画を見るときよりも、夢中になって本を読んでいるときのほうが、わたしたちの頭のなかで多くのことが起こっているからなのよ。映画はほかのことを考えながらでも見つけることができるけど、本の場合はそうはいかない。本を読むには集中力が必要。集中できなくなれば、わたしたちはその本を読むのをやめてしまう。だから、一冊の本を読み上げるってことは、概して、他人によってつくられた映像を見るよりもはるかに能動的で、そうぞう的で、自己実現的な行為なのよ。

『ビッビ・ボッケンのふしぎ図書館』にちょっとした「あとがき」を書きくわえることになったのは、じつは日本の出版社の担当編集者からの提案によるものなの。日本での翻訳出版にさいして、わたしたちの近況報告をかねて、手紙を送り合ったらどうかっていわれたのよ。それでいま、この手紙を書いているわけ。

ところで、日本語の本はタテに読むって知ってた、ニルス？上から下に。しかもページの右端の行から読みはじめて、左へ左へと読み進んでいく。そして、左側のページの最後の行を読み終えたときに、つぎのページをめくるわけよ。

これって、なんかすごくエキゾチックだと思わない？ノルウェー語の「読む」っていう動詞はドイツ語からきたものだけど、もともとは「集める」とか「拾い上げる」とかいう意味だった。その語源のラテン語の動詞もおなじ意味だったらしいわ。要するに、本がタテ書きだろうとヨコ書きだろうと、書かれた文字を集めたり拾い上げたりするのは、けっきょくおなじわけよね。とはいっても、何千何万もの異なる漢字を「拾い上げる」って考えただけでも、わたしなんかは頭がくらくらしてしまう。ああ、『ビッビ・ボッケンのふしぎな図書館』を日本語で読めたらなあ。さぞかし刺激的な経験になると思うんだけど！

この文章の[A][B][C]の全体を通して、作者が伝えようとしていることは何でしょうか。あなたの考えを自由に書きなさい。